

《座談会》1970年代の気象学を語る、について

根 本 順 吉*

“天気”の本年1月号に掲載された表題のような座談会記事について、筆者は別のところ¹⁾でかなりくわしくこれを批判し、あわせて筆者の立場からする見通しを与えた。それでここに改めて論ずることは、ほとんどないのであるが、本誌の読者のために私の考え方のいくつかを要約すると次のようになる。

1. 70年代の気象学がどのように発展してゆくかの展望を与える場合に、二つの立場が考えられる。その一つは学問や技術の現段階をふまえて、それら自身の発展を純粹に追跡し展望する立場である。他の一つは人間を中心とした環境の一部を取扱う科学として、人間の生活や社会の将来との関連において、気象学のこれからの問題を考える立場である。“天気”掲載の座談会記事は前者に属するものである。また後者に属するものとしては米国の気象学会機関誌 Bull. of the Amer. Met. Soc. 1969年4月号をあげることができるが、これは天気の不注意な改造 (inadvertent modification) について、目下の緊急な問題を解説したものである。

2. 第一の立場からする討議の一つの結論として、“研究の組織化はむづかしい”(2-3, p.15) ことがあげられ、D氏はこれをトレーニングの不足に帰しているが (p.16)、筆者はむしろC氏の発言 (p.15) 中の“冒険を”という言葉、“新しい問題意識”とおきかえ、“今までのことは抜きにして、新しい問題意識を求めて仕事をかえていかねば”²⁾ 70年代の共通した目標など立たないと思う。筆者はアメリカ流のプラグマチズムを礼讃するわけではないが、高い問題意識を持つことが、現在もっとも大切であり、また説得力があると思う。

3. 筆者は70年代の気象学の立ち向うべき大問題として、気候変動と、グローバルな大気および海洋の汚染の問題をあげたい。この二つの問題に対して基礎・応用とも、あらゆる智力を集中すべきであると考え、その場

合にこれらの問題を解決するために、その基礎となる問題を従来のやり方のように全く切りはなして研究を組むことをせず、一つの目標の下に、基礎も応用も含む形でプロジェクトを行なうことが、科学と技術の離反をふせぐことになるであろう。

4. ここ数十年以内におけるグローバルな大気汚染の増加は誠に急激なものがある。また石油による海洋の汚染は沿岸部のみならず、大洋の中央部まで及んでいるという、いくつかの証拠があげられている。これらの結果が人間に及ぼす影響については、現在なお議論の多いところであるが、内外共にかなり近い将来において終末論的な結果を予想したのも少なくない³⁾。非常に悪い結果が到来するかもしれないことは、他の分野 (生態学等) からも考えられ、着々と証拠立てられていることでもある。近い将来、人類が滅亡するというような議論は、明るい未来論の流行する現在、一笑にふせられるかもしれないが、何らの処置もとられず、事態がこのまま進むならば、それはかなりの確度で予想されることではないだろうか⁴⁾。現在、このような問題が現実になっていることを考えるとき、単に気象学の立場からの発言といった形で、人為的に切りとった断片的対象を、蔽密に研究をつづけるだけでは間に合わないように思うのである。

日本気象学会は昭和29年5月、水爆実験禁止に関する声明⁵⁾を出し、この声明にそったいくつかの業績も発表されたが、現在の大気、海洋の汚染については、何らの態度も表明されず、甚だ関心がうすいように思われる。しかし私は現在、進行しつつある大気および海洋の汚染は水爆実験の影響以上に深刻なものがあると思う。また大気汚染に対して関心が持たれるといっても、それはローカルな技術的可否を論ずる程度に止まり、グローバルな立場からの、フィロソフィをもった発言はほとんどないように思われるのである。あふれるばかりの緊急な研究内容が議論されず、その入れものばかりが真先に将来

* 気象庁図書課

—1970年4月27日受理—

計画として議論されているような現状は、学会自身が官庁にならってビュロクラティックに変形しつつある一つの証拠ではないだろうか。

文 献

- 1) 根本順吉 (1970) : 気象学の立場から. 蟻塔 Vol. 16, No. 4 特集“地球科学者は'70年代をどうみるか”所収 p. 2-5.
- 2) 根本順吉 (1970) : 終末論的気候変動観, 群像 (1970) 6月号, これは気候変動に関連して書いたほんの一例である. 外国のものをあげればきりが無いが, 古典としてカーソン(1962): 生と死の妙薬, 自然均衡の破壊者 <化学薬品> (青樹築一氏の邦訳あり, 新潮社, (1964) だけをあ

げておこう.

- 3) 哲学者の市井三郎氏は, 70年4月24日の岩波市民講座“歴史における進歩の意味”の中で, 多くの論証で裏づけながら, 半ば直観的に“21世紀まで人間が生き残る確率は非常に少ない”ことをのべた.
- 4) この声明は日本気象学会75年史 (1957) p. 67-68 に掲載されている. “人間の名において”原子兵器の禁止を訴えたこの声明文は格調の高い内容をもったものであり, 全国気象職組 (1959) の伊勢湾台風についての声明と共に, 歴史的な問題意識の高さにおいて, 現在もなお反省のよすがとなるものである.

第 15 期 第 14 回常任理事会議事録

日 時 昭和45年3月9日 15.00~18.00
場 所 気象庁研修教室
出席者 山本理事長, 大田, 竹内, 根本, 朝倉, 岸保, 松本, 小平, 北川, 各常任理事

報 告

庶 務: 2月26日 朝日学術奨励金候補者として気象研究所長北岡竜海外共同研究者2名を推薦した(研究題目, 局地的な大雨. 大雪の客観的予測方式に関する研究)

議 題

議決事項

1. 昭和45年度総会準備について
理事長あいさつ, 事業経過報告, 事業計画, 予算案および決算書を次回までにまとめる.
2. 学会賞, 藤原賞候補者について
各推薦委員長から報告された次の候補者をそれぞれ適当と認める
学会賞
赤道附近の準地衝風の運動の研究
松野太郎(九州大学理学部)
大気イオンスペクトラムの研究
三崎方郎(気象研究所)

藤原賞

北日本の長期予報と日本の豪雪についての永年にわたる業績

福田喜代志(新潟地方気象台)

3. 学会奨励金(假称)について
十分な研究費, 研究環境に恵まれない会員の研究を奨励するため奨励金制度をもうけることとし「奨励金受領者選定規定(案)」が承認された.
 4. その他
 - (1) 外国文献集刊行事務の推進について
AMS. Tellus に問合せの手紙を出すことにする.
 - (2) 正野教授記念論文集の論文依頼案について
和文・欧文とも一部修正の上承認された.
 - (3) 長期計画委員会設置について
1965年の長期計画を基礎とし新しい展望の下に新長期計画を立案するため長期計画委員会を設ける.
- 承認事項
賛助会員, 中国電力KK, 通常会員浅野正二他14名の入会を承認する.